

昔むかし、ある町に、ひとりのきこりがいました。きこりは、毎日、林に出かけて行って、まきを取って、それを売って暮らしていました。

この林に、ねずみとライオンが住んでいました。ねずみとライオンは、仲が悪くて、いつもけんかばかりしていました。ある日、ライオンがねずみにいいました。

「おまえみたいになちっぽけなやつが、けものの中でいちばん強いこのおれと、よくけんかできるもんだな」

ねずみは、

「強いということは、かしこいということだよ。ぼくは、小さいけれど、君よりかしこいから、ぼくのほうが強いんだ。でもね、いちばん強い動物は人間だよ。人間は、どんな動物よりもかしこいからね」といいました。

「そんなことそだよ」と、ライオンはいいました。

そのとき、きこりが林の中を歩いていました。ねずみが、きこりを遠くから見つけて、「ほら、あれが人間だよ。君と、どちらが強いか、見せておくれよ」といいました。ライオンは、きこり目がけて走って行きました。

「待て。おれは、おまえと戦いたいんだ」

きこりは、びっくりしましたが、

「よし、戦おう。でも、今は力を持って来ていないから、明日まで待ってくれ」といいました。ライオンは、

「いやだ。今日、戦おう」といいました。

「じゃあ、家に帰って力を取って来るよ。力を持たずに戦うわけにはいかないだろう」

「いいよ。おれはここで待っている」

けれども、きこりは、

「おまえ、そのあいだに逃げるつもりだろう」といいました。

「おれは逃げない」

「じゃあ、おまえをこの木にしぼりつけておくよ」

きこりは、木の皮のなわで、ライオンを木にしぼりつけました。そして、もう一本のなわで、ライオンを思いきりたたきました。ライオンは、毛皮がぼろぼろになりました。きこりは、

「これは、ほんの小さい力だよ。さて、家に帰って大きい力を取って来るとするか」といって、まきを背負って行ってしまいました。

木こりが行ってしまふと、ねずみがしげみの中から出て来ました。ライオンは、

「ねずみ君、なわをほどこいておくれよ」とたのみました。ねずみは、

「ほどこいてあげるけどね、これからはぼくと仲良くするって約束するかい」といいました。

「約束するとも」

そこで、ねずみは、なわをかみ切ってやりました。ライオンは、飛ぶように町へ走って

行きました。そして、きこりの家を見つけると、家の中に入って行つて、

「さあ、来たぞ。戦おうじゃないか」といいました。きこりは、

「こりやうれしいなあ。だが、まずすわつて、何か一口食べよう。晩ご飯を作つて来るから、待つていてくれないか」といいました。そして、ライオンを家に残して外に出ると、戸にかぎをかけました。それから、外の小屋の台所で、大きなべいっばいにお湯をわかししました。お湯がわくと、きこりは、なべを持って家のわら屋根に上りました。そして、わらのすきまから、ライオン目がけて、ぐらぐら煮たつたお湯を注ぎました。

ライオンは悲鳴を上げました。ライオンの毛皮は、もっとぼろぼろになりました。ライオンは、戸に体当たりして外に飛び出すと、あらんかぎりの速さで逃げました。

林まで来ると、ライオンはねずみに会いました。

「おまえのせいで、ひどい目にあつた」

ライオンはねずみに飛びかかりました。ねずみはさけびました。

「人間だ。人間が来たぞ」

ライオンは、いちもくさんに逃げました。そして、二度と人間のいる危険な林にはもどりませんでした。ライオンがたくさん住んでいる国に行つて、そこで暮らすことにしました。

いっぽう、きこりは、ライオンが行つてしまうと、ひとりごとをいいました。

「あの林にはもう行けないぞ。こんどライオンに会つたら、きつところされるからな。よその町に引っこすことにしよう」

きこりは、荷物をまとめて町を出て、よその国で暮らし始めました。

ある日、きこりは、まきを取つて帰るとちゆう、森のはずれでひと休みしようと、大きな木の下にすわりました。木の側に、深い深い穴がありました。

しばらくすると、一頭のライオンがきこりを見つけました。ライオンは仲間たちに「えものがいるぞ」知らせました。たくさんのライオンが走つて来るのを見て、きこりは急いで木のとっぺんによじ登りました。見下ろすと、あの毛皮がぼろぼろになったライオンもまじっていました。

ライオンたちは、木をとりまきました。そこへ、ライオンの親分が、やつて来て、

「こんなにおおぜいで、何のために、あわれなきこりをころすんだ。羊や牛ならむこうにいくらでもいるじゃないか」といいました。すると、毛皮がぼろぼろのライオンがい

いました。

「あれは、ただのきこりではありません。木の皮のむちと熱いお湯で、わたしをひどい目にあわせた人間です」

ライオンたちは、

「たしかに、おまえの毛皮はまったくひどい。危険な人間をころしてしまえ」と、口ぐちにいいました。親分は、

「そんな悪いやつなら、ころしてしまおう。みんな、順々に上へ上へと乗つかつて、あいつの所まで登るんだ」といいました。

ライオンたちは、順々に、いっぴきの上にもういっぴきが乗つて、木のみきにライオ

ンばしごを作りました。最後に親分が登って行つて、きこりに飛びかかろうとしました。そのとき、きこりがさけびました。

「みんなお湯を注いで、木の皮のむちで打ってやるぞ」

ライオンたちはびっくりしました。でも、なんといつてもいちばん驚いたのは、いちばん下でみんなをささえていた、毛皮がぼろぼろのライオンでした。ぼろぼろのライオンは、とっさに、わきへ飛びのきました。そしてそのまま、まっすぐ、深い深い穴の中に落っこちて行きました。もちろん、上に乗っていたライオンたちのはしごも総くずれ。みんな穴の中に落っこちてしまいました。木こりは、木から下りて来て、穴に向かつてさけびました。

「おれは、ここで待つてゐるぞ。でも、あんまり待たせると、みんなやつつけちゃうぞ」
ライオンたちは、穴の中で話し合いました。

「このままだと、あいつにころされなくても、おれたちはみな、うえ死にするぞ」

「ぼろぼろライオンがあんなことをいったからだ」

「だが、おれたちを穴から救い出せるのは、あのきこりしかいないんだぞ」

ライオンの親分は、いいました。

「あのきこりと話をしてみよう」

「そうしてください」と、ほかのライオンたちがいいました。

親分はきこりに向かつていいました。

「おうい、聞いてくれ」

「聞いてるよ」と、きこりはいいました。

「お願いです。わたしたちみんなを引っ張り上げて、命を助けてください。わたしたちは、一生、あなたにお仕えます。どんな時でもあなたをお助けしますから」

「じゃあ、おれがどこにしよう、いつ何時でも、ライオン四頭が、おれに付きしたがって、必要なときにはおれのために戦うって、ちかうか」

「ちかいます」

ライオンたちは次つぎに、ちかいました。そこで、きこりは、木の皮のなわを穴に下ろして、ライオンたちを引き上げてやりました。

このときから、きこりは、ライオンの王になりました。そして、どこへ行くにも、いつでも四頭のライオンが付きしたがうようになりました。

あるとき、きこりは、ふるさとの町に行きました。きこりがライオンをしたがえているのを見ると、人びとはおどろいて、国王のもとへ走りました。

「ライオンの王がやって来ます。助けてください」

国王は町のえらいさんたちを集めて、そろって、ライオンの王を出むかえたということです。

おしまい。

原話…『世界の民話7 アフリカ』中山淳子訳／ぎょうせい

再話…村上郁

